



わかば

2020. 10. 10
(令和2年) 第20-24号

文責 校長 保谷 力

ホームページ <http://www.shokookai.org/gakkou.htm> 毎週火曜日更新

教育目標 「帰国後、日本の教育に円滑に適応できるよう、日本の学校における学習指導要領に沿った国語、算数(数学)の学力の維持、併せて生活・生徒指導を行う。」

重点目標 一人一人の笑顔輝く学校づくり～期待登校・満足下校～

校長 保谷 力

オレゴンの清々しい青空も雲に覆われ、季節は雨期へと向かっているのでしょうか。肌寒い日々が多くなって参りました。保護者の皆様には、日頃より本校の教育にご理解、ご協力を頂き、心から感謝申し上げます。

さて、10月の後期学習に合わせて行って参りました、幼稚部・小学部の入園・入学式、中学部の入学集会ですが、来週に予定している高等部1年生を残すのみとなりました。やはり小さい子供たちにとっては、大きなインパクトがあったようです。保護者の方より「入学式を行っていただき、気が引き締まりました。初めての式で違った学校の雰囲気を感じられ、よい経験になりました。」など、率直なご感想をいただきました。

中高生については、HRの時間におじゃまし、入学のお祝いを述べ、続いて1校時の授業参観を行う形で参加しました。1、2組共に子供たちが明るく、笑顔で迎えてくれたことに嬉しく思いました。学級の雰囲気は担任と子供たちとでつくるものです。中学1年生は両クラス共に担任との信頼関係がしっかりできていると感じました。入学をお祝いし、はなむけの言葉としてお話した内容を簡潔にして掲載いたします。



中学1年生 入学集会

中学部 入学集会での校長のお話より(1年1組)



皆さんは、フランスの作家サン＝テグジュペリの「星の王子様」という本を読んだことがあるでしょうか。この本の中で「本当に大切なものは目には見えない。」という言葉が出てきます。1組の皆さんには、このお話をします。

「ある星に王子は真っ赤なバラの花と暮らしていました。王子は懸命にバラの世話をし、世界中にたった1本しかないこのバラを心から愛していました。ある日、別の星に旅に出た王子は、その星のバラ園にたどり着きます。どうしたことでしょう。ここには何千、何万という赤いバラが咲き乱れていました。王子は悲しくなり泣きました。なぜなら、王子の愛したバラは世界中でたった一本しかないと思っていたからです。」

その帰り道、一匹のキツネが王子の前に現れます。王子は「一緒に遊ぼう」と誘うのですが、「やだよ！僕は君になついていないから」と断られるのです。キツネは続けて「もし、君と僕とのかかわりができたら、きっと僕は嬉しくて、嬉しくて、来る日も来る日も君がやってくるのが待ち遠しくなる。君は僕の掛け替えのない人間になる。僕は君の掛け替えのないキツネになるんだ。」キツネは言いました。「本当に大切なものは目には見えない。」王子は少しわかったような気がしました。あくる朝、同じバラ園に来てみて王子はびっくりしました。何千、何万とあるバラの花のどれを見ても自分の愛したバラと少しも似ていないことに気が付きます。王子がバラのことを考え費やした時間は掛け替えのないものであり、決して見間違えるものでないことに気付くのです。私たちは見た目の美しさや形にとらわれがちですが、本当に大切なものは目には見えないというお話です。

これから過ごす中学3年間は長いようで、あっという間に過ぎてゆきます。友達のこと、勉強のこと、家族のことなど、この時期にたくさん思い悩んでほしいと思います。そして、皆さんにとって「本当に大切なもの」を見つけてほしいと思います。

中学部 入学集会での校長のお話より（1年2組）



皆さんが六年生で習った「やまなし」の作者である宮沢賢治さんは、『注文の多い料理店』という物語の序文の中で『私たちは氷砂糖を欲しいくらい持たないでも、透き通った風を食べ、桃色に輝く朝の日光を飲むことができます。』と述べています。今日は賢治の言う『幸せ』について少しお話をします。

私たち人間は誰しも幸せになりたいと願い毎日を生きています。ところが、『あなにとって幸せとは何ですか。』と問われると、考え込んでしまう人も多いようです。富や財が豊富にあること。有名人になってお金を稼ぐこと。有名ブランドの服や着物を着て街を歩くことなど、人によっては様々な幸せの形があるようです。しかし、賢治の言う『幸せ』とは、特別のことでなく、当たり前な日常の中に幸せはあるのだと言っています。しかし、私たちには当たり前のことを幸せであると感じることができず、特別なことこそが幸せであると考えてしまうのです。「歩けること。学校に行けること。毎日、ご飯が食べられこと。友達と話せること。家族がみんなでごちそうすること。」など、ごく当たり前のことのように思いますが、失って初めてこの当たり前の出来事が掛け替えのないものであったことに気づくのです。

皆さんは、卒業式も入学式もできず、学校へも通うことができず、今日まで過ごしてきました。コロナウィルスの蔓延は私たち人類にとって大きな不幸をもたらしました。しかし、この不幸をきっかけに、「当たり前の生活」が実は掛け替えのないものであったことに、気づくことができたのではないのでしょうか。

賢治の言う「氷砂糖」とは、富や財など私たち人間の果てしない欲望を表し、「透き通った風」や「桃色に輝く朝の日光」とは、誰でもが感じることでできる当たり前な日々の暮らしを示しているのかも知れません。掛け替えのない一日一日を大切に思いながら、中学校生活を頑張ってください。